

激戦「大坂冬の陣 今福の戦い」の絵図を見よう!!

古文書倶楽部

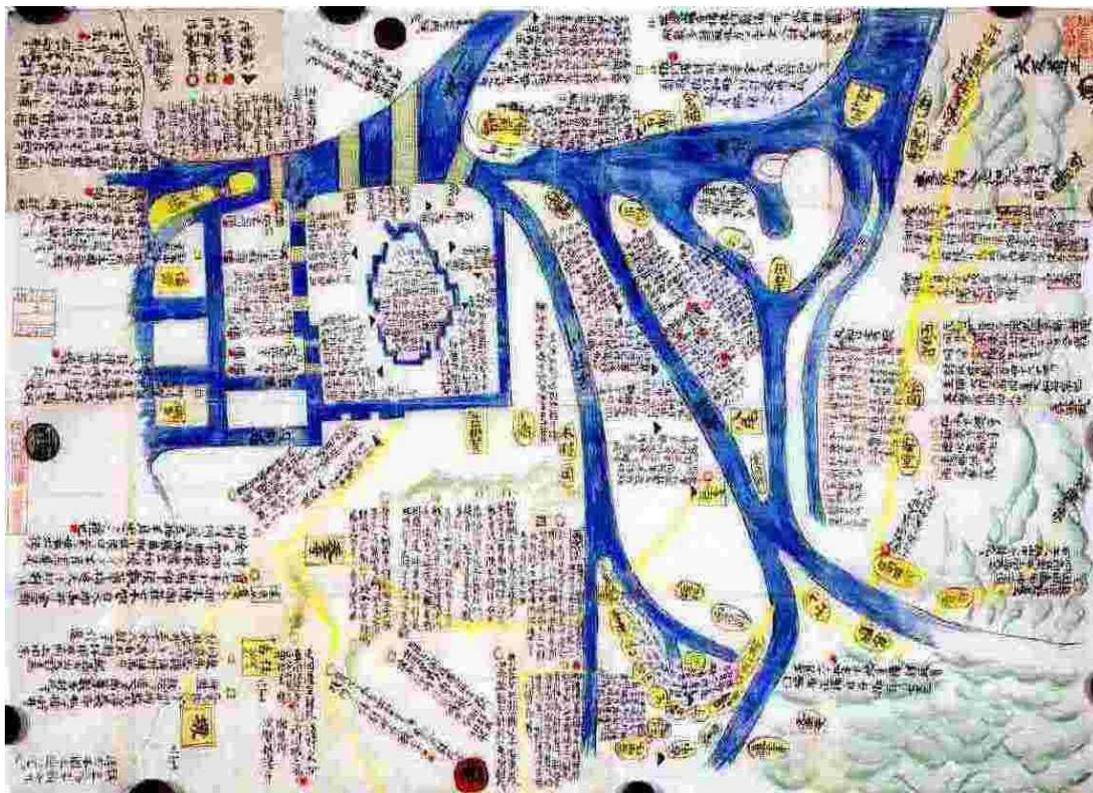
【発行】

秋田県公文書館

古文書班

2006.6

第8号



大坂の陣関係複製絵図史料一覧

整理記号・番号	資料名
混乙 - 170	大坂冬御陣図
混乙 - 171 - 2	大坂夏御陣図一
混乙 - 171 - 2	大坂夏御陣図二
混乙 - 175	大坂御陣城内人数配方精図
県C - 389	大坂今福表之絵図
A H 212 - 3	摂州大坂冬夏御陣之図全
A H 212 - 6	大坂陣場図 - 冬夏両陣 -

徳川家康が豊臣秀頼を滅ぼした慶長十九年(一六一四)・二十年(一六一五)の大坂冬の陣・夏の陣はあまりにも有名ですが、秋田県公文書館所蔵の絵図の中にもその関係絵図があります。

大坂冬の陣に秋田藩初代藩主佐竹義宣は、二百一騎、約二千の兵を率いて参戦しました。講談の影響のせいか、冬の陣では真田丸の攻防が有名ですが、実は冬の陣最大の激戦は鳴野・今福の戦いでした。対する豊臣方の将は後藤又兵衛で、この戦いで秋田藩では家老の渋江内膳政光ら九名と内膳家人六名(戸祭十兵衛・来栖修理介・鈴木正左衛門・黒川伝右衛門・浜野平左衛門・駒野目六兵衛)の合わせて十五名が戦死し、他に多くの負傷者を出しました。

しかし、佐竹勢の活躍は戦況に大きな影響を与えたことから、特に活躍した家臣五人(戸村十太夫・梅津半右衛門・信太内蔵介・大塚九郎兵衛・黒沢甚兵衛)には、將軍徳川秀忠から「感状」が与えられました。

翌年の夏の陣には、佐竹勢は大坂に向かう途上、平岡(現東大阪市)で落城を聞き、合戦には間に合いませんでした。それだけに大坂冬の陣は、戦国期を切り抜けてきた佐竹勢の最後の戦争として藩士たちに記憶され、これが江戸時代にも多くの合戦伝記や絵図が作製される背景となりました。

秋田県公文書館では「大坂の陣」関連の絵図の複製を作製し、より閲覧しやすくしていますので、是非ご覧ください。
(伊藤成孝)

レファレンスO&Aのコーナー

羽州街道の一里塚がどこにあったか、古文書で確認できませんか？

湊文書の「帰国道中行程記」(湊78)をご覧ください。史料は10cm×7.5センチ。携帯して持ち歩いたであろうその史料には、江戸から久保田までの一里塚の場所が書いてあります。さらに距離までも書いてある優れたもの！

ただし、この史料の記載から、その正確な位置を特定するのは難しそう…

大曲上入口二有

花立 小川橋 川舟渡

一里七丁二十間 新河原二有 川舟渡

神宮寺

廿四丁四十間 畑中二有

樋岡新町

一里廿丁十一間 畑中三本杉二有

刈和野

二里九丁廿六間 畑中刈和野八丁程下

しかし、距離が分かればシメタもの！

さあ一里塚探索の旅に出発だ！ (畑中康博)

古文書小ネタ

「夫婦喧嘩は犬も食わぬ」の巻、

今日七ツ頃上川端孫助と申者、口論之上女房へ包丁投付、背へ疵付候段、庄屋久右衛門申出、御足軽目付よりも申出候二付、孫助儀丁

内にて見、鑓番相付、北島貞元へ療治申付候右有願之。(「石井忠行日記」安政四年八月晦日条)

コラコラ孫助！腹を立てても奥さんに包丁を投げてはいかん！

さてこの記事でもう一つ興味深いのは、足軽が町人のもめことを報告していることです。

実は秋田の歴史研究で、足軽の実態はよく分かってないのが現状です。しかしこの記事から、足軽が町のおまわりさんの仕事をしていたことが分かります。

ともあれ「仲良きことは美しきことかな」を心掛けることに越したことはありませんね。

(畑中康博)

古文書二はればなし

幕末秋田藩・周旋方のゆくえ

幕末の秋田藩において、政局の推進に大きな役割を担った周旋方の登場に深く関わる興味深い書状があります。

それは京都定居の役にある近藤良之進から、国元にいる小野崎鉄蔵に宛てたもので、文久三年(一八六三)六月十九日の出来事です。

内容を簡潔に述べると、鳥取藩池田慶徳の家臣である千葉重太郎・勝部静男の両名が近藤の屋敷を訪ね、「当時諸家様有志の者差し出され、

勤王周旋を相尽すことゆえ」名門佐竹家からもぜひ有志を出して欲しいとの要望でした。

しかし、この唐突な申し出に近藤良之進は「国元久保田の指示なく人数を差し出すことは無理である」と婉曲に断ります。かえって「周旋方の有志とはどんな任務ですか」と千葉らに問いたします。その返答は「朝廷の御為め第一と心がけ、公武御間柄を始め万事御内密の御模様を御探索すること」というものでした。

ところが、翌元治元年になると情勢の変動に伴い、長州藩などの尊攘派と気脈を通じる秋田藩士が増え、いつしか藩の枠をはみ出て行動するようになり、「宇都宮孟綱日記」に「兼て周旋方の最上なる平田延太郎につき献上方の役を免ずる」(九月二十八日条)とか、「御小姓小野崎鉄蔵は甚だ周旋家であるからその職を解く」(十月四日条)等の記事が散見するようになります。

このように周旋方は藩によって一時は圧迫されたかに見えますが、完全には排除されませんでした。そのわけは、藩が彼らの持つ全国的な情勢分析機能に頼らざるを得ない弱みがあったからです。

やがて秋田藩の周旋方メンバーは鎮撫軍支援の先導役となりますが、それは彼らが諸藩の周旋方の人々との交流を通じて、全国の趨勢に沿った行動ができるまでに成長していた結果と考えられます。

(加藤民夫)